



中野 和久 特任教授  
Nakano Kazuhisa

■ 専門医  
日本リウマチ学会リウマチ専門医  
日本内科学会総合内科専門医

「川崎医科大学には研究と臨床を同時に進めていけるバックグラウンドがあります。今後は難病である強皮症をはじめ、さまざまな研究を続けて、治療の進展に貢献していきたいと考えています。」

QOL: Quality Of Life(生活の質)  
ADL: Activities of Daily Living(日常生活動作)

お問合せ  
川崎医科大学附属病院  
倉敷市松島577-0864 621111  
https://h.kawasaki-m.ac.jp  
川崎医科大学総合医療センター  
岡山市北区山下2-6-1 0862525111  
https://g.kawasaki-m.ac.jp

※写真は取材用に撮影したものです  
■2021年10月25日号掲載  
本文中の医学情報、写真は掲載当時のものです。



今年8月から川崎医科大学附属病院で始まった「関節リウマチの教育入院」は、中野教授が中心となって新設されたもの。基本65歳以上の患者を対象とし、症状や合併症のリスク、治療法、薬のことや初診のスクリーニングなど、「正しい知識」を患者に知ってもらうことを目的としている。



リウマチ・膠原病は慢性的な疾患だけに治療は長期にわたるケースが多い。それだけに「患者さんの生活や人生をしっかりと考えた医療判断を心がけています」と中野教授は想いを語る。



リウマチ・膠原病の臨床研究や創薬では、わが国でも屈指の実績を誇る施設で経験を積んできた中野教授、その豊富なキャリアが当科の特長的な取り組みに生かされている。

他科との連携でよりよい診療

今年四月から当科に部長として着任した中野教授は当科の取り組みをこう説明する。「患者さんとの信頼関係がとても重要です。治療薬についてもわかりやすく説明し、患者さんに納得していただいたうえで治療を進めています」と話す。また「リウマチ患者は通常よりも呼吸器感染症に罹患しやすいことが知られており、「より安全性の高い治療を遂行するためには、呼吸器合併症を適切に評価し、必要に応じて治療介入を行なうことが大切」と中野教授は指摘する。そのため当科では放射線科(画像診断)や呼吸器内科などと連携して呼吸器合併症を的確に把握したうえで、診療にあたっている。

質の高い専門医の育成や難病に対する研究に取り組む「川崎医科大学附属病院」と「川崎医科大学総合医療センター」。今後はさらにそれぞれの特長や強みを生かし、不明熱や自己免疫病態など、診断や対応が難しい患者の診療にも積極的に取り組んでいきたいと話す両教授。さらなる連携強化で患者のQOL・ADLのますますの向上を目指している。

## 医療最前線 » vol.76

川崎医科大学附属病院  
リウマチ・膠原病科  
川崎医科大学総合医療センター  
内科

守田 吉孝 教授  
Morita Yoshitaka

■ 専門医  
日本リウマチ学会リウマチ専門医  
「当科は年間約2500人の患者さんを診療しています。4月から中野教授を迎え、診療体制を新たにすることで、『より質の高い患者さん本位の医療』をお届けしたいと思っています。」

Report!

# 患者本位の新たな診療体制で リウマチ・膠原病の治療に挑む

「ふたつの附属病院」、それぞれの強みを生かした診療体制を確立  
「川崎医科大学附属病院リウマチ・膠原病科は、二〇一〇年に新設されました。現在、岡山県内はもとより広島県東部、さらには関西や四国からも多くの患者さんが来院しています。患者さんの年齢層も若い方から高齢者まで幅広く、さまざまな病態の患者さんを診療しています」と話すのは当科を最前線で率いる守田教授。  
リウマチ・膠原病は、自己免疫が原因で発症する疾患の総称。治療は薬物療法がおも、特にリウマチの発症早期は薬の有効性がより高く、この時期の治療法選択が将来の関節予後を決定すると考えられている。そのためリウマチ・膠原病科ではさまざまな病態の患者に対し、抗リウマチ薬や生物学的製剤、近年新たに開発された経口の分子標的薬を適切に組み合わせた治療を行なっている。  
さらに注目すべきは、川崎医科大学においてこれまで倉敷市の川崎医科大学附属病院だけの対応であった専門の医師の診療が、岡山市の川崎医科大学総合医療センターでも受けられるようになったことである。「継続的な治療が必要な場合が多く、通院などの利便性はとても重要です。倉敷市と岡山市のふたつの附属病院で診療できるようにしたこと、より患者さんのニーズに合った診療が可能となりました」と守田教授は語る。